

上トシ、讚州、豫州ヨリ出ルヲ次トシ、和州、江州、河州ヲ次トス、上品ノ者ハ染家ニ送リ、下品ノ者ヲ紫根ト名ケテ醫家ニ賣ル、用ユルモノ宜シク揀ブベシ、

〔廣益國產考〕^三紫草紫根を用ふるものゆゑ紫根とよべり〇中略 紫草を作る土地の事

濕地の北うけ、あるひは山陰の陰地は忌べし、隨ふん日あたりよき地に作るべし、砂眞土の水氣の滯ふらざる地宜し、黒ぼこと至つての赤土はあし、ねば土あし、流水場などの極砂土は宜しからず、綿麥などの能くできる地ならば、生育せずといふ事なし、

蒔旬并地ごしらへ

蒔旬は五月の中より、四五日まへに蒔て宜し、都ての作物に時節のたがひて宜しきものはなけれども、別して此紫草は時節をばづし蒔ては、生育あしきものなれば、其時をばづすべからず、早過てもおそくても宜しからず、扱蒔べき畑は、先一面に塊をくだきて打ならし置、畦幅一尺五寸づ、小鍬其土地の鍬大ならば、少しにて筋を引、畑一反に種子貳升五合を升やうのものに入左りへもち、右の手にてひねり蒔にすべし、此實を鶻どりよく好んで喰ふものなれば蒔たる時、其用心すべし、花咲實に成たるときは、猶更此防をすべし、蒔終て麥の通りに土を覆べし、尤生出て間引くものにあらざれば、餘り繁くしては宜しからず、隨分むらなきやう蒔べし、併しあまりまげきは間引すつべし、植肥しは糞の熟したるを敷て蒔て宜し、又は干鰯油粕の水には、だしたるにても宜し、何れも熟したるを用ふべし、もつとも麥まくより多く施て蒔べし、

肥し手入

生出十日もすぎで鍬を入、又引つゞきて二度も入べし、草多き地は三度もつゞきてけづるべし、生出て壹寸位に伸たる時、干鰯にても、油粕にても、穴肥にすべし、穴肥といふは、生出たる紫草の根際壹寸貳三分脇に、間五寸ほどづ、置、穴つきと云すゝき研木の先のごとき棒をもて突明、其中に